



写真1 西尾隠岐守一族累代の墓



原市を足掛かりに 躍進した西尾吉次 28年間の原市統治

原市の第二産業道路沿いに、妙厳寺という曹洞宗の寺院がある。ここには「西尾隠岐守一族累代の墓(写真1)」として、市文化財にも指定されている大名一族の墓がある。妙厳寺は初代西尾吉次が文禄年間(1592~96)に、自身の菩提寺として再興したと伝えられる。西尾氏が常州土浦(茨城県土浦市)に移封されて上尾市域を去った後も、一族の菩提寺として初代から11代までの当主の墓が建てられた。大名一族の墓がそろっているのは、近隣では類例が乏しく貴重である。

天正十八(1590)年、後北条氏が豊臣秀吉によって滅ぼされると、関東に移封された徳川家康の入国とともに、足立郡である上尾市域東部の旗本となったのが初代の西尾吉次であった。中山道の通る上尾宿周辺や、原市から桶川にかけての5千石の知行地が与えられた。徳川家が西尾氏に原市を知行地として与えたのは、この地が岩付城と松山城とを結ぶ交通の要衝であり、宿場としての機能も併せ持っていたため、ここを拠点として地域支配を整備させるためであったと考えられる。

吉次は慶長四(1599)年に隠岐守に叙任、同七(1602)年には美濃国で7千石加増され、都合1万2千石を支配する大名となった。その後元和二(1616)年、2代忠永の時には上野国群馬郡白井(群馬県渋川市)で8千石を加増され、同四(1618)年に常州土浦城主2万石に命じら

れると、西尾氏は土浦に移封された。これにより、28年間にわたる原市藩ともいわれている西尾氏の支配は終わった。

妙厳寺の他にも、原市には西尾氏ゆかりの品々が残る。その中の一つに妙厳寺の南方に位置する、相頓寺の地藏堂に安置されている仏像がある。地藏堂は、明治二(1896)年に廃寺となった地藏院から移されたもので、その中の延命地藏菩薩写真(2)は、文禄五(1596)年に西尾氏が開眼したという記述が『新編武蔵風土記稿』に残されている。また、妙厳寺の東側にある上尾下には「陣屋」という地域がある。確かな証拠はないが、西尾吉次が陣屋を構えたといわれる伝承地の一つである。

原市での旗本を足掛かりに躍進していった西尾氏一族は、3代忠照の時に5千石を加増され駿河国田中に、4代忠成の時には遠江横須賀に移封された。5代忠尚は老中を務め、次代以降も寺社奉行など幕府の要職を歴任し、3万5千石を治める大名にまで登りつめた。

(上尾市生涯学習課)



写真2 延命地藏菩薩像

コラム column

妙厳寺の永楽通宝紋鞍

原市の妙厳寺には寺宝として「永楽通宝紋鞍(写真1)」が伝わっている。この鞍は昔から存在は知られていたが、実は長い間所在不明となっていたものである。

文化・文政期(1804~29年)に編さんされた『新編武蔵風土記稿』の記述の中では、永楽銭の紋を付け、永正二(1505)年十月吉日銘のある鞍一口、他に鑑一双、長刀一振、槍一筋などが西尾吉次の遺品として挙げられている。また、寛政元(1798)年7月に妙厳寺を訪問した藩役人が書いたと

される『原市はなし』(千葉県鴨川市富岡家文書)(写真2)にも、図入りで詳しい寸法などとともに紹介されている。

長い間所在不明だったこの鞍は、昭和60年の薬師堂改築の際に、縁の下に隠されていた鞍と鑑が偶然発見された。いつ頃ここに隠されたのかは定かではないが、永楽通宝紋や寸法などが文書の記述と一致し、鑑定の結果、文書に記されている物であることが証明された。



写真1 永楽通宝紋鞍



写真2 『原市はなし』(上尾市史より)